

### エジネーのオーラルヒストリー (3) ソルマージャブ (下)

ナムラ・サランゲレル・児玉香菜子

このテキスト<sup>1</sup>は中国内モンゴル自治区アラシャー (阿拉善) 盟エジネー<sup>2</sup> (額濟納) 旗出身、現在アラシャー盟人民政府所在地バヤンホト市在住のソルマージャブさんのオーラルヒストリーの後編である<sup>3</sup>。本編はソルマージャブさんが文化大革命中に刑務所と労働改造所 (強制労働キャンプ) で過ごした日々から始まる。

\*\*\*

彼らはこのようにわたしを抑えて、出世させないようにしていました。文化大革命では、彼らはいつも互いに批判闘争し続け、毎日階級闘争を行われなければいけないので、革命の幹部たちの間でもトラブルがおきていました。少しでも機嫌が悪くなると、あの2人、つまりバルジルとソドノムジャムチャの2人に、

「あなたたちも少し気を付けなさい。あなたたちは自分の身分を忘れてはいけません。元々あなたたちは反革命者だ。ソルマージャブとあなたたちは皆一緒なのだ。あなたたち2人はソルマージャブとグルになったグループのメンバーなのだよ。あなたたちは自分の間違いを告白し、またソルマージャブを摘発しただけ。だからあなたたちを大目にみているのだ。あなたたちは無罪ではなく有罪だ」

と怒鳴っていました。このように巻き添えにしていました。もし、わたしにこのような無実の罪を着させなければ、あの2人をわたしの巻き添えにすることはありませんでした。それで、バルジルとソドノムの2人は

「ああ、もう終わりだ。元々は他人に害を与え、自分を守ろうとしたが、逆に自分が彼の巻き添えになってしまった」

と悲嘆していたそうです。これが原因で、彼らを政治面でも、思想の面でも出世させないようにしていたようです。ソドナムジャムチャは共産党に入党できません。ソドノムジャムチャにはそんな運がありません。バルジルはまだよいです。共産党に入党していました。あの裁判所の所長でしたよ。

「あなたには今このような問題がありましたので、あなたの党員の身分は危ういです。そうでしょ

---

<sup>1</sup> 本テキストはサランゲレル、アラタンツェツェグ、児玉により採録されたものである。言語はモンゴル語である。採録されたものをサランゲレルがモンゴル文字で書き起こし、それをナムラが翻訳し、ナムラと児玉が確認した。

<sup>2</sup> 本テキストのモンゴル語表記はエジネー旗の方言に準じる。

<sup>3</sup> 前編は『千葉大学 ユーラシア言語文化論講座』16 : 327-351 に掲載。

う。あなたはいつ入党しましたか。あなたは『反革命者がハルハに行こうとしている。あそこに行こうとしている』と話してから、自分には何の問題もないように過ごしていました。話したのは2、3年前でしょう。あなたは2、3年も隠しました。どうしてすぐに告発しませんでしたか。その反革命者をあなたたち2人はなぜそんなに長く隠し守っていましたか」

こうなったら、もう話す言葉はありませんよ。本当でしょう。自分で嘘を作ったのだから仕方ありませんよ。嘘をついたのが、逆に自分の頭に当たってしまいました。

わたしは労働改造所に行って、1979年5月に出ました。おお、79年の、そうだ、79年4月にそこから出て、ここにたどり着いたときには、すでに1979年5月になっていました。労働改造所から出て、酒泉にしばらくいて、ここに着いた時はすでに5月になっていました。ちょうど5月にこの旗に着きました。労働改造所から釈放されたのは4月です。わたしには懲役15年の判決が言い渡されました。そうすると、わたしの罪を晴らすには旗の初級人民裁判所ではできません。必ず中級レベルの人民裁判所<sup>4</sup>が審判してこそ、罪を晴らすことができます。旗レベルの人民裁判所ではできません。10年以内なら、旗レベルの人民裁判所で裁決できます。つまり県レベルの人民裁判所ですよ。再審判する時は10年以内の8、9、5、7年ならできます。10年以上なら、旗レベルの人民裁判所では審判できません。15年の刑なら中級の裁判所が裁決します。20年、無期なら、省レベルの裁判所が裁決します。死刑犯の裁判なら「中央<sup>5</sup>が裁決に同意した」という許可書をもらいます。つまり、死刑犯の冤罪を晴らすには中央の許可が必要になります。

ここから労働改造所に行き、審査を行い、審査資料を酒泉に報告し、酒泉の中級人民裁判所<sup>6</sup>が捺印した文書を労働改造所に渡すことになっています。「この人を釈放する」という文書です。いくつもの裁決書を裁決させ、「どこのだれを今釈放する」という文書です。たとえば、「今ソルマージャブを釈放する」と裁決した文書です。労働改造所に酒泉の中級人民裁判所の捺印した文書が出てから、わたしに交通費を与えて、

「あなたは酒泉の中級人民裁判所に行き申請しなさい」

と言われました。それで、わたしは労働改造所から出て、酒泉の中級人民裁判所に行き、申請しました。申請した後、わたしをどうするかを彼らが決めます。わたしをエジネーに行かせるのか。他のところに配置するのか。酒泉の中級人民裁判所が決めることです。

酒泉の中級人民裁判所がわたしに

「あなたはエジネーに行きなさい。自分の故郷に戻りなさい。彼らがあなたを配置します」

と言い、わたしを行かせました。そうして、仕事に復帰させてくれました。彼らはまた尋ねます。そして、この人は以前にどんな仕事に従事していたのか、どんなことをしていたのかなどについて書い

<sup>4</sup> 国家裁判機関で、中級は省では県に、内モンゴル自治区では盟と市にある。

<sup>5</sup> 最高人民裁判所。

<sup>6</sup> 当時、エジネー旗は甘粛省に属していた。

てくれました。では、「この人は逮捕される前に映画隊にいました」と書きます。わたしは旗の映画隊で働いていました。映画隊は文化体育局に属していました。当時、エジネー旗革命委員会文化体育局がありました。そこで、この人に仕事に復帰させるために、酒泉地方共産党委員会と共産党組織部はエジネー旗の共産党組織部にも何かを書いてあげたいです。個人調書を調べました。「このような人だったので釈放しました。それで名誉を回復しました。この人の名誉を回復させてあげて、あなたたちはどうするか」みたいことが書かれた文書が渡されました。共産党組織部にこのような文書が渡されました。エジネー旗革命委員会の文化体育局はこれと中級人民裁判所の紹介状を持って、旗の共産党組織部を訪ねました。組織部はどこに配置してくれますか。必ず1つのところに配置します。その後、財政局に行き、給料を調整します。すべての未払い給料を再支給します。文書では「12年以上の給料を再支給しなさい」としていますよ。それで、再支給されました。当時のわたしの月給は72元何角<sup>7</sup>でした。72元から21元を差し引きました。あなたは労働改造所と刑務所に入っていたとしても、すべて国の食べ物を食べ、国の医療を受け、国の服を着ていました。そうでしょう。それはすべて国のお金です。あなたの給料も国のお金です。ですから、その国のお金を差し引くのは当然です。残ったお金を国からあなたにあげるのも当たり前です。そうでしょう。それで51元、1ヶ月51円で計算し、全部で12年半ぐらいの給料を再支給しました。12年4ヶ月だったでしょうか。そのぐらいだったと記憶しています。わたしには合計で7千余元くれたようです。また何かが差し引かれていましたよ。

それで、わたしをジャルガラント村<sup>8</sup>の中学校に教員として配置しました。そこに2年いた後、旗でモンゴル言語と文字の工作事務室と言うか、モンゴル言語と文字の事務室と言う新しい機関ができましたよ。この機関の副主任に任命されました。そう、この双子の1人であるナラントヤーと一緒に働きました。1981、82年にはこの機関に所属していました。そこで7年か、8年働いて、定年退職しました。1990年になる前です。89年に定年退職しました。北京の学生運動の時です。そこでそんな騒ぎが起きていました。6月に退職しました。では、わたしの話はこれぐらいにしましょう。

——あなたがこのように過ごしていた時、妻と子どもたちはどこにいましたか。

当時、わたしには家庭もなく、妻もいませんでした。離婚してから再婚していませんでした。のちに家庭を作ったのは1986年のことです。労働改造所から出てきた後のことです。出てきてから7、8年たった後のことです。わたしは1979年に出てきました。わたしは妻と1986年に結婚しました。春の4月に、現在の妻その人はわたしを訪ねてここに来て、婚約して、6月に盟で結婚式を挙げました。4月に知り合い、6月に結婚式を挙げました。わたしの妻は36歳になっていた独身女性でした。まだ

---

<sup>7</sup> 補助通貨の単位。10角が1元にあたる。

<sup>8</sup> モンゴル語でソム。

結婚していませんでした。彼女は 34 歳か 35 歳の時に 1 回、絵を描くために我が旗に来たことがありました。当時、牧畜民の家にいました。35,36 歳になる独身女性ですから、滞在していた時、

「なぜ結婚相手を探さないの。どうしてこんなに遅くまで結婚していないの」

と人びとは質問していたそうです。わたしの妻は

「ああ、若い頃、結婚を考えたこともありません。わたしの体は肺の病気にかかっていました。その上、大学の卒業証明書をもらうために度々大学に通っていました。のちに働いたら、自分の故郷ではなく、銀川に行き、回族のところでは何年も教師をしました。それで、よい人と出会えないまま、時が流れ、こんな年になりました。エジネーで合う人がいれば、結婚してもよいです」

と言いました。そうしたら、ある人は

「ああ、わたしたちのところに 1 人の、刑務所に入っていた 40 過ぎ、50 歳になっている老人がいます。30 歳の時に刑務所に入り、45 歳の時に出てきました。とてもよい若者でした。刑務所で全てを失って、今は出てきています。では、その若者はどうでしょうか。若者というか、老人はどうでしょうか」

と言ったそうです。

「この人は刑務所に閉じ込められて、心臓病になりました。少しでも機嫌が悪くなると、暴れますよ。今は、性格が大変荒くなりました。機嫌が少し悪い、気に食わない、少しい言葉を言うのと、彼はあなたとけんかしますよ、彼は。今はこんなに短気になりました。もとのよい性格はこの人にはもう見られなくなりました。気性がとても荒く、激しいと言う以外、他の問題はありません」と言ってあげたそうです。当時、わたしの妻はわたしを 1 回見たことがあるそうです。商店を出て、街を歩いていた時、

「あつ、わたしたちが言っていたソルマージャブとはあの人ですよ」

と他の人が教えてあげたので、彼女はわたしの後ろ姿を 1 回見たそうです。向こうに向かって歩いていたときに 1 回見たと言っていました。のちに、1 年前かな、そうです。1985 年に盟で 1 回会議を開いたことがありました。民族宗教についての会議です。わたしはここから 2 人のお坊さんを連れて行きました。また民族の仕事をやっている 5、6 人、2 人のお坊さんともう 2、3 人いました。盟で民族宗教の会議に参加しました。わたしの義父もアラシャー盟アラシャー左旗の民族宗教局で働いていました。それで、義父もその会議に参加しました。妻は自分の父と会う時、わたしを見ましたよ。妻はその会場に入り、自分の父と会う時、わたしが向こうの方に歩く姿を見たそうです。エジネーのどんな人かと、わたしたちの住んでいた宿舍のドアに名前が全部張ってありました。ここに、エジネーの誰誰、アラシャー右旗の誰誰、アラシャー左旗の誰誰、このように宿舍に名前が貼られてありましたよ。その名前を見て、

「エジネーのソルマージャブと言うのはその人です」

と言いました。どんなところで働いているかなどについて、ツェレンドマーらは全部説明してあげました。当時、このドグルのミダグやツェレンドマーらが話してあげたようです。それで、1986年春、妻がドグルの家に来ました。ドグルはわたしを呼び、ドグルの家で知り合いました。

そうですね。彼女ははじめ1985年か1984年にエジネーに来た時、ダ・グンダが運転するドグルの車に乗ってきました。ダ・グンダは統一戦線工作部の車を運転していました。当時、ドグルは今の奥さんと知り合いました。バルダンの家に行き、ソブノールを見て、絵を描き、次にサイハントーレイに行きました。わたしについて聞いていたと話していました。顔を合わせていませんが、向こうに向かって歩いていたのを見て、50歳過ぎとは思えないほど、歩き方がとても軽快に見えたそうです。わたしを30何歳の子供かと思ったのか。何を思ったのか、分かりません。

「わたしは向こうに急いで歩いて行ってしまった」

と話していました。このようにして結婚しました。

はじめの妻とは1959年に結婚して、翌年の1960年に離婚しました。ナムジルマーと言う人でした。このナムジルマー老人ですよ。彼女はどこかで乳製品を売っていました。彼女はわたしと結婚したことがある老人ですよ。わたしは彼女と結婚した後、離婚しました。そのナムジルマーはのちにフヘーと言う人と結婚しました。わたしたちはすぐ離婚しました。彼女は以前ジルバトと付き合っていて、結婚の話が出ていました。しかし、ジルバトが小さな罪を犯し、評判が悪くなり、彼と別れました。それはわたしが蘭州から戻って来る前のことです。彼女は彼のお金を使い込んでいたので、彼は悔んでいました。そのあと、わたしと結婚した彼女は、ジルバトとよりを戻したかったのか、わたしと離婚しました。わたしも気持ちが悪くなっていたので離婚しました。その後、彼女は多くの人と付き合いましたが、みんなを振り、ジルバトとも、よりを戻しませんでした。最後はフヘーと結婚しました。彼女は多くの病にかかったので、わたしと離婚したあとも、治療するためにフフホトなどいろいろなところに行っていました。そもそも彼女はわたしとは異なり、マーゾン村に配属されていました。わたしたち2人は一緒に暮らす家ありません。ソブノール村で同じグループのメンバーとして仕事をしていた、結婚証明書ももらい、一緒に暮らしました。のちに家屋などを用意し、1つの家はできましたが、台所道具など何もありません。彼女はずっとゴルナイ村で仕事をしていました。彼女はゴルナイ村の婦女連合会の幹部でした。ジグドツァガン村がゴルナイ村になり、次にマーゾン村になりました。わたしはずっと旗で仕事していました。わたしと結婚したあとも、彼女は公社<sup>9</sup>の人ですから、ずっと公社に住んでいました。わたしが刑務所に入る前のことです。ずっと前のことです。1960年に離婚しました。そう、わたしは68年に刑務所に入りましたよ。彼女と離婚して8年後に刑務所に閉じ込められました。その8年間に、わたしは結婚していません。どうしてかと言うと、もう離婚した、また離婚を経験した人ですから、評判もよくありません。わたしも結婚する気がなく、人びと

---

<sup>9</sup> 人民公社のこと。現在の村（ソム）に相当。

の間で評判がよくありません。当時、毎日、階級闘争だけをやって、政治の話ばかりで、妻や子どもなど家庭のことを考える暇はありません。今の時代はいいですね。当時の人間関係には大きな問題が存在していましたよ。皆で政治の話をする、お互いに嫉妬するので大変です。どこかで話したでしょう、臭い知識人とされているわたしみたいな、本を読んで知識を学んだ、知識を持っている若者を、労働者、農民や軍隊の幹部たちはとても嫌います。とても嫉妬します。そのうえ、他の幹部もわたしにとっても嫉妬します。嫉妬とは何かと言うと、当時の政策は知識人たちを一種の搾取階級としてみていることです。臭い知識人としていますから。知識人より、足に泥が付いている、体に牛糞や泥が付いている労働者や農民の方がはるかに清潔だと言われていました。ですから、知識人たちは臭い知識人として、邪魔だと認識されています。幹部に選出する、出世させる、上位に任命する際には必ず貧困出身者で、労働者、農民、軍隊の幹部ではなければなりません。臭い知識人、地主、資本家、豊かな農民、豊かな資本を持つ、出身が悪い人の子孫を上を立てません。大事にしません。社会主義を支持する、共産党の指導を支持する、思想改革を受け入れる知識を持っている若者や知識人になれば、選出や出世する資格が与えられます。1人の若者が革命者か反革命者かを定める基準は、労働者、農民、軍隊と団結したいかどうかです。団結したい者は革命者、団結したくないのは反革命者となります。こういうよい理論基準とよい政策があるのだから、知識を持ってない人たちは、われわれみたいな知識を持っている人たちを嫉妬します。恋愛にしても、少女、成人女性や男性みんな同じでした。そうでしょう。女性、きれいな女性が工場労働者や農民を好きになっているか、それとも臭い知識人を好きになっているか、が注目されます。人の愛情や恋愛にとっては、相手の政治面や過去と出身に関係がありませんよ。誰かが好きなら、愛情も生まれるでしょう。ですが、出自を隠します。他の人に嫉妬されます。共産党の入党申請にも影響を及ぼします。仕事を評価する時にも同じです。わたしの両親、出身、過去が悪い上、態度も悪いとなると、もう終わりです。わたしと結婚する人はいませんよ。

——あなたは刑務所にいる時、どのように暮らしていましたか。殴られましたか。

おお、ここの刑務所にいた時、判決を認めないので殴ります。気魄を殺すというか、勢いを抑える必要があると見て、大きな圧力をかけます。夜回りの軍人もひどく殴ります。何で殴っていたかと言うと、軍人ならベルトで殴ります。その革製のベルトで殴ります。ああ、そのベルトはとても痛いんです。また、刑務所の警備員なら、木の棒があれば木の棒で、何かあれば、それで殴ります。さらに、わたしを裁決した後、わたしは判決に同意しなかったもので、よく殴られました。同意したら、わたしはすぐに労働改造所に送られ、労働に参加させられます。判決に同意しなかったもので、わたしを労働改造所に送ることもできません。判決に同意しなかったもので、労働改造所に行けば、上級に訴訟し、問題を起こします。判決に同意したら、そこに署名させます。「わたしは上記の判決に同意します。

上級に訴訟しません」と署名すれば、あなたを判決書と一緒に労働改造所に送ります。労働改造所は「あなたは自分の罪を認めて判決に同意した」と言います。それで、判決に同意しないわたしたちをどうするかと言うと、朝 8 時に起こされ、起きた朝 8 時から、夜の 10 時まで、オンドルの上にあぐらをかいて座らせます。少しでも横になってはいけません。わたしはちょうど 3 年間、毎日そのように座っていました。毎朝 8 時に必ず起きなければなりません。朝のお茶と言えば、1 杯のおもゆを飲みます。朝のお茶とはそれです。昼にはまた饅頭 1 つと粥 1 杯くれます。夕食も饅頭 1 つと粥 1 杯です。

わたしはこの刑務所において、労働改造所に送られなかった間、労働させられずに閉じ込められていました。労働改造所に着いたら、状況が変わります。毎日のノルマが決められ、仕事をさせられます。パグ（レンガのこと）を打たせられれば、パグを知っていますよね、その正方形の泥で作ったものをパグと言います。パグを打つなら、1 日に 600 回打つようにと必ずノルマが決めています。では、鉱山を開き、石膏石を割るでしょう。その石を爆弾で割り、落とします。二輪荷車をおいて、それに毎日必ず 20 トンの石膏石を乗せて出します。20 トンとは少ない数ではありませんよ。わたしは若いから一等の労働力です。わたしは一等の労働力ですよ。一等の労働力とは若者ですよ。30 歳過ぎていました。わたしに課せられた仕事は毎日必ず 20 トンの石、半日に 10 トン、1 日に 20 トンの石を出すことです。その山を崩してしまいます。石膏石には石と泥が混在しています。爆弾を設置し、その山を崩します。あなたは崩した山の中から、石を分別し、泥から分け、石膏石を選んで、20 トンを満たします。このようです。この山の麓から石膏石を選び運び、二輪荷車を押して、100 メートル離れた場所にもって行き、集めます。鉄道の駅に持って行き、山にします。二輪荷車を押してきて、また運びます。毎日 20 トンの石を出します。毎日 20 トンの石膏石を出すノルマを達成できたなら、日曜日に休めます。しかし、毎日石膏石 20 トンを達成できず、ある日は 18 トン、ある日は 16 トンなら、日曜日に休めません。また山に行き、石を割る仕事を続けます。労働改造所とはこのようです。労働改造所では、毎日 8 時間労働します。労働改造所から出るとき、銃を持つ兵が付いてきました。仕事の現場に着いてみると、その周りにコンクリートでできた堡塁があり、堡塁には銃を持っている人が見張っています。各方面に銃を設置し、解放軍が銃を持って見張っています。その銃であなたち全員をやれますよ。1 人でも反抗してはいけません。反抗があれば、すぐ捕えなければいけません。反抗や騒動が起きているのに、知らないふりをするのはやってはいけないことです。もし、夜周りの人の銃を奪ったら、もうお終りです。それであなたは終わりです。もし 1 人でも反抗する人がいれば、あなたはすぐに報告します、その場で押し捕まえるべきです。労働改造所はとても危険な場所ですよ。仕事上の危険と言えば、山が倒れ、石が転がってくることがあります。それは全部、危険要素です。なかからでも、反抗や騒動が起き、逃走するなどの危険があります。いやあ、反抗や騒動を他の人が起こしますよね。そばにいて何もしていない人、何の問題もない人が巻き込まれて命を

落とす危険がありますよ。

わたしが刑務所にいる間に両親は亡くなりました。親戚がわたしに会いに来たことはありません。一度もありません。わたしの弟も手紙を書いてくれましたが、会いに来たことはありません。そうです。1人も来たことはありません。そこに行き、8年たちましたが、一度も来たことはありません。きょうだい親戚が会いに来たことはありません。一度も来ていません。牧畜民の友人も来ていません。どうして来られますか。自分の弟を見に来たとしたら、

「反革命者の弟と階級の境界線を分けないのか。あなたは階級の境界線を分けませんか」と言われますよ。

「共産党はあなたの弟を餓死させない。彼を改造してよい人に養成しています。あなたが会いに行く必要がありますか。あなたは共産党の政策を信じていないのですか。あなたは共産党の労働改造政策を疑っていますか」

と、逆に吊るしあげられる可能性もあります。この時期は階級闘争と政治が優先されているので、人はこのようにします。また、牧畜地域の牧畜民は大塞<sup>10</sup>から学んでいた時で、彼らは毎日労働して、頭を上げる暇もありませんでした。毎日仕事が彼らを追いかけてきます。文化大革命の時代とはこのようです。

ここの刑務所にも3年間いましたよ。ここにいた時労働に参加させません。わたしに労働を全然させませんでした。閉じ込めたままで、全く出しません。労働に参加したいなら、まず刑務所から出なければなりません。外に出てからこそ労働に参加できます。外に出れば、人や社会を分かるでしょう。時事がどうなっているか。中ソの関係はどうなっているか。国際関係がどうなっているか。これらを観察できるから、怖がっています。また社会を観察します。ああ、その人はこのように生きているか。この人はどんな様子で暮らしているか。これらを知ることはわたしにとって収穫ですよ。労働に参加すれば、働いている間にいろいろ模索し、いろいろなことが起こりえます。当時やらせることは電線柱の穴掘りの仕事です。情報が伝わります。人は手紙を渡すか、あるいは他の方法で外と連絡します。もしかしたら、逃走するかもしれません。この若者は判決に同意しないうちに、夜周りの人の銃を奪って問題を起こすかもしれません。それで、出て行くなら、短銃を持っている人が付いてきます。刑務所に入った人に仕事をさせるなら必ず手錠を外します。わたしの手には手錠がありません。必要な時、わたしについて仕事を監視している人が向こうを見ている間に、石で頭を打って、銃を奪うことも可能ですよ。しかし、仕事をしている人の手に手錠はとても無理です。そのため、罪を認めない人は出しません。ここの刑務所での3年間はずっと手錠をかけられていました。はじめ、手に手錠がありましたが、足には足かせはありませんでした。逮捕する時には掛けられました。刑務所にいるとき、足には鉄の足かせがありました。わたしはその罪を認めず、同意しないので、わたしに圧力をかけて、

---

<sup>10</sup> 「農業は大塞から学ぶ」と言う1960年代の中国で提唱されていた政治的スローガン。



必ず足かせをつけるようになりました。

いやあ、些細なことで、理由を付けて殴ります。朝8時に起き、おもゆ1杯を飲ませてから座らせます。12時になり、粥1杯とトウモロコシ粉で作ったスープ1杯を飲んで、黒い饅頭1つを食べます。それ以外は、ベッドの上にあぐらをかいて座らせるだけです。夏は居眠りします。そして、よだれがでます。刑務所のドアに小さな木製ののぞき穴があります。警備員はそれを開けてのぞきます。そのうえ、刑務所のなかでもスパイがいます。そのスパイが静かに下りて来て、寝ているかどうか、布団に寄りかかって横になっているかどうかを探ります。そのドアを開け、どんどん情報を伝えます。冬は昼が短く、とても寒いです。夏は眠くてたまりません。夜が短く昼が長く、とても暑いですから。それで居眠りしている時、そののぞき穴を開けて見られてしまいます。すると、ドアを開けて入って来て、軍人のあの厚いベルトで、革製のベルトを外して殴ります。刑務所の夜周りの人も、外から太いタマリスク（ギョリュウ科ギョリュウ属）を持ってきて、殴ります。

「あなたは自分を何だと思っているのか。なんで自分が犯した罪を反省しないで寝ているのか。寝て、ここを楽しむために来たのか。大胆不敵だな」

と激しく殴ります。このように、苦しみ、罪を認めさせます。認めれば、逮捕したことが正しくなります。人を逮捕して、また釈放するとは簡単なことではありません。人を1回逮捕するとは。法律は遊びではありません。何の理由もなく、1人の国家幹部、革命幹部を逮捕したので、何か罪がなければいけません。そうでしょう。人を逮捕するというのは遊びではありません。また釈放してもいいのか。釈放してはいけません。どうやって説明しますか。逮捕するのは簡単です。しかし、罪ということとは簡単ではありませんよ。逆に訴訟を起こします。何の理由もなく釈放してどうしますか。そうでしょう。しかし、わたしの罪については全部、人の言った言葉だけで、他に何の証拠もありません。人の口だけですから、録音や映像があれば、この人は本当に言った、と信じられます。当時はそんな録音する機械がないため、お互いに罪をなすりつけることは簡単です。あなたはわたしに罪をなすりつけられますし、わたしもあなたに罪をなすりつけられます。「彼はこうこう言っていました。共産党を罵っていました。このように毛主席を罵りました」と罪をなすりつけることができます。わたしも人に罪をなすりつけることができます。録音機がないためです。わたしたち2人が口裏をあわせて、あなたに罪をなすりつけることもできます。そうでしょう。

——あなたは今どんな本を書いていますか。

わたしは今トルゴードの民謡の物語『物語 トルゴードの民謡』を書いています。わたしは自分で歌いません。わたしが文化大革命について書くなら、本当にとってもよい資料があります。心配することはありません。わたしはこれを小説にして、名前を変えて、わたしを訴えた人たちの名前も変えて、そうして書くなら本当に簡単ですよ。資料は事実のものが既にありますから。しかし、今書いてはい

けません。文化大革命を書いてはいけません。どうしてと言うと理由があります。そうではなければ、全国で大勢の人が書くでしょう。そうでしょう。

全部詳しく書いておくのはよいことです。書き残し、名前を全部書き換えて保存するならよいです。そして、いつか発行します。しかし、このようなことは言いにくいですよ。内モンゴルで内人党（内蒙古人民革命党）というものを掘り起こして、何万人の幹部に無実の罪を着せて殺しました。誰がやったのか、はっきりしません。ああ、林彪の4人グループがこれらをしたとして終わらせました。林彪です。彼らに罪を着せています。しかし、無実の罪を着せられた人は誰に責任を問いますか。彼らには当てにできるところがありません。

実はトルゴード党について本当に書いてもよいですよ。わたしたちのエジネーでこのようなものが書かれたらよいです。トルゴード人民党、これは最近のことで、全部はつきり覚えています。はじまりと経過を詳しく書きます。今はこれを書いてはいけません。トルゴード人民党に最初に言及して書いたのは誰でしたか。ツェリンオドだったそうです。彼を連れて行って責めた結果、嘘をつかせて書かせました。文化大革命とはこういうことです。すべてのことはわたしと同じようですよ。たとえば、わたしがあなたを害しようと思ったら、あなたと仲の良い1人を騙して、責めて嘘をつかせます。それで、その人を証人にして、摘発する資料や訴える資料を作成し、その人の拇印を押させ、これを持ってきて、あなたを害します。そうです。無実の罪や誤ったことなどはすべてこのようなことです。文化大革命中に、劉少奇に対して、「司令部を攻撃して潰そう」という壁新聞が出されました。劉少奇について、このような壁新聞が書かれたので、劉少奇に無実の罪を着せましたよ。ああ、当時はこのようにしていました。それで投降したと嘘をついて、無実の罪を着せました。トルゴード人民党について本当に書くべきです。今すぐ書くならいいですが、もうすこし時間がたつと人がいなくなりますよ。今書いたとしても、原稿を保存しておく以外、絶対に出版してはいけません。文化大革命は、大騒動、大きな損失でしたよ。書くなら、なぜこんな大騒動や損失が起きたのかを書きますよね。各地で起きていた大騒動を書けます。しかし書いてはいけませんよ。

今、これらを書けるのは、わたしたちみたいによく知っている人だけです。隠れて書くしかありません。よく知らない人が知っている人を訪ねて書くのは無理です。あとで、全部面倒なことになりますよ。わたしたちの悪かったことを掘り返そうとしていると思われ、危険です。そうです。振りかえれば、文化大革命を誰が起こしたのか。これをはっきりすべきですよ。詳しく書くべきです。しかし、こんなことをしたら、最後にどんな結果になりますか。ですから書けません。わたしたちが恐れていることですよ。今から見て、他のヨーロッパの党、ロシアの共産党、ブルガリアの共産党、モンゴルの人民革命党などはなぜ倒れましたか。すべて文化大革命みたいに左傾的な政策を実施し、無実の罪や誤ったことをやり、最後に倒れましたよ。40、50年のうちに、人民に大きな被害をもたらしましたよ。そうでしょう。ハルハの革命党はなぜ倒れたのか。ハルハで階級闘争を起こし、モンゴルの

20 万人が国外に逃げました。現在の内モンゴルにいるハルハ人たちは、全部ハルハの革命の時期に逃げてきた人たちですよ。考えてみてください。ハルハで 10 万人の僧侶が殺されました。100 万にも満たない人口で、10 万人の僧侶を殺したことを考えてみてください。モンゴル人がどのぐらいいるとして、モンゴル人は自分の国の人をこのように殺しました。では、モンゴルの革命党は今、政治舞台から降りなさい。これを誰がやったのか。すでに亡くなったチョバルサンがやりましたよ。チョバルサンがなぜやったかという、ロシアのスターリンとグルになって、こんなことをやりましたよ。それでこのようになりました。こんなことを解決するにはまだ 7, 8 年かかります。少なくとも 60 年過ぎた後ようやく、正しかったかどうかが出てきます。60 年過ぎないと、こんなことをしてはいけません。文化大革命は言うまでもなく、国が解放<sup>11</sup>されてから 56 年しかたっていないですよ。

—あなたはハルハに親戚を探しに行きませんでしたか。

いいえ、ハルハにいる親戚を探していません。どうやって探しますか。何の手掛かりもありません。わたしの父の妹はそうに行ったそうです。わたしは名前も知りません。そんな時期にマーズンから出たということしか知りません。わたしの実母の親戚について聞かなかったの、分かりません。わたしの実母について、ガワーのノートに記されていました。ノートにはドルマージャブと書かれていました。また、誰誰と書かれていましたよ。わたしたちの名前を。このドルマージャブは誰誰の母親、わたしとわたしの兄の名前が書かれていました。彼らの実母のドルマージャブと最後のページに説明していましたよ。そうしないと、ドルマージャブと言う人は大勢います。そのようにガワーのノートに書いてありました。そのノートを旗の政治局が出版するそうです。そのノートにはわたしの母はどのように書かれていました。その大盛魁<sup>12</sup>とはわたしの母が言ったと書いてありました。そこに書かれていました。以下のような理由でわたしたちは出てきた、と言っていました。わたしが幼い頃、8 歳の時、そのように故郷から出てきました。また、ウルジバートルについても話していました。「ゲンチグの野」という歌を作り、歌いながら馬に乗って行ったそうです。わたしの実母は若い頃、ウルジバートルの夫人が搾乳する時に子牛を引いてあげていたそうです。「子牛を捕まえてあげていた」と話していましたよ。このウルジバートルの夫人はハルハ人です。ハルハ人だから、同じハルハ人をそばにおいて、搾乳させたり、子牛を引かせたりしていましたよ。当時、母は貧乏人です。同じハルハ人だったので、親しくしていたのでしょう。わたしの母は歌がとても上手な人です。ですから、その歌のためにそばに連れて来て、召使いにしていたのかもしれませんが。わたしは歌を歌えません。わたしは歌などに対して興味がありません。

---

<sup>11</sup> 1949 年の中華人民共和国成立を言う。

<sup>12</sup> 清代にモンゴル貿易を担ったいわゆる商社の屋号

——ノインのハボンとはどのような義務を背負っている人ですか。

ハボンと言うのはノインの家に住み、ノインのカー<sup>13</sup>（ヒヤとも言う）を手配する人です。他のことはしません。このカーたちを行かせるのは行かせ、来るべき人を選んで来て、指示を出す義務があります。これらカーを選んで呼び寄せる人です。他のことをしません。ノインのカーの管理人です。1人のノインには24人のカーがいます。わたしの知っている限りはそうです。始めにどのぐらいいたか分かりません。のちに24人になりました。月に2人が当番に当たります。1ヶ月で交替します。それで、他の2人を選んで来て、当番させます。のちに誰の時代か、トゥブシンバヤル・ノインの時代にはすでに24人になっていました。ルハンワーンジャブ・ノインの時代も24人のカーでした。彼らはノインの家に住み、ノインのカーに教えます。カーに仕事を手配します。ノインはすべてを言いません。「では、今日、馬を連れて来て」、「ノインはここにいらっしやる」とか、「何何を用意しなさい」、「そこに情報を伝える」などを、ノインは自分で言いません。カーに「あなたは今日、何何して」とハボンが言います。ハボンとはカーを管理する官吏です。官吏と言うか、官吏の一番下の席に座ります。政府で会議があるとき、参加します。官吏の名義で参加します。しかし、ハボンは一番下の席に座ります。官吏はジンサの順で座ります。肩書きの上下によりジンサが異なります。上にかぶっているジンサの色によって座ります。フンダは何をするかと言うと、フンダの仕事は政府の受付になります。官吏の代わりに受付します。政府の受付を担当します。また、フンダは連絡員にもなれます。連絡員はここからよそに連絡をするために行きます。重要な事柄の場合、普通の軍人や普通の通信人、つまり普通のカーが連絡してはいけないことがあります。重要なことを普通のカーに任せると、信頼性が低くなります。そのようなときにフンダを行かせます。フンダが行きます。「このような重要な情報があります」、「このように言っています」と重要な文書と大事なモノをフンダが渡します。ゴンゴル・フンダと言う人がいました。彼は秘密の仕事に行きます。フンダは秘密の連絡にも行けます。フンダは官吏の肩書きで行く資格があります。つまり、官吏の資格を持っています。しかし、あまり高くないです。フンダをよそに派遣する時、肩書きを少し上げてあげます。それが仕事する時、役に立ちます。モンゴル国に連れて行かれた5人の兵士を連れて来るために、ハンハル・ドルジとゴンゴル・フンダの2人を行かせました。当時、ハンハルは何でもない、刑務所から出てきた無職の人でした。しかし、突然この人をここで1回試しました。ハルハに渡した文書には、「村のジャンギのフンダ、村のジャンギと同じ肩書きのフンダ」と書きました。ゴンゴルも同じです。村のフンダと書きました。村のフンダ、ジャンギと同じ等級、ジャンギと同じ肩書きと書きました。肩書きはジャンギの等級ですが、そんな仕事はしません。重要なところで、彼をこのようにさせてみて、与えた仕事が無事に完遂されれば、職をそのままあげてしまいます。それで、村のフンダ、ジャンギになります。ドルジが仕事を完遂して帰って来ると、「よくやった。手柄をたててくれた。あなたをジャンギにし

---

<sup>13</sup> カーはノインの護衛をいう。

ます」と後でジャンギの肩書きをあげました。さらにもう1回、境界線を定めたことがあります。1944年に1回、アラシャーとエジネーが境界線を定めるため、このゴルナイ、シトゴルに行く時、アラシャー側はメーレンと同じ肩書きのジャランのホワン・ムンヘウルジと言いましたよ。メーレンの肩書きのジャランと言うことです。この人の正式な肩書きはジャランです。しかし、この境界線のことで行っている間、この人はメーレンの官職で仕事しているという意味です。メーレンの官職で行っているが、自身がもらった正式な肩書きはジャランです。それで、メーレン職級のジャラン・ホワン・ムンクウルジと書いていました。この人はメーレンの官職で、この仕事をやっている人です。協理とは必ずタイジ出自の者になります。他の人はだめです。管旗章京は平民でも大丈夫です。平民は協理になってはいけません。ノインになっていない、黄金家族<sup>14</sup>のタイジだけが協理になれます。また、管旗章京以下は必ず平民であるべきです。そうです。平民は、一番上位に上ったとしても、管旗章京を越えませんが、平民は協理になってはいけません。もちろん、平民はノインにもなれません。ジャサグ・ノインは必ず黄金家族の一員で、貴族ではなければなりません。協理も貴族ではなければなりません。平民は協理になれません。管旗章京はタイジの出身者でもなれます。大丈夫です。タイジでも管旗章京になれます。ウルジ・バダルホが休みを取るとき、サンジェは管旗章京でしたよ。ダシはメーレンでした。平民は管旗章京の官職以上にはなれません。ペードンは何をするかと言うと、ペードンとは、ジャンギより下、何するのですか。ちょっと待って。ペードンとフンダは兵士を組織する人です。兵士に呼び掛け、軍隊を組織する人です。徴兵する、兵士を招集する、軍隊を組むなどは、ペードンがすることと聞きました。ジャンギは指揮官であり、戦争の時はジャンギが軍隊を指揮します。軍隊を指揮して戦います。そうです。徴兵、招集などはペードンがするそうです。招集した兵士を率いて指揮する時、フンダは指揮しないで、必ずジャンギが指揮します。しかし、フンダは兵士として軍隊に参加できます。1つのソム<sup>15</sup>は必ず150人でなければなりません。150人を1人が率いて、戦争に参加すべきです。軍隊の行軍、休憩などをジャンギが指揮します。ジャンギをジャランが指揮します。解散、通知、徴兵、どのように宣伝して集めるかなどはペードンの仕事です。徴兵する通知を持って宣伝、配布し、兵士を集めて来るなどは全部ペードンが担当します。ペードンかフンダと言います。戦争がない時は、政府にいて、受付をします。政府の官吏が常に出勤するのと同じく、ペードン、フンダも出勤できます。ジャランは何をするかと言うと、ジャランも軍隊を指揮する人です。彼らは皆、軍隊の関係者です。戦争の時、軍隊を指揮する人をジャラン、ジャンギと言います。戦争がない、軍隊を招集しない時、政府の職員として受付につきます。政府では常に事務の人が出勤します。協理や管旗章京は毎日出勤しません。会議を開いて、決議を出したら、各自帰ってしまいます。常に出勤しているのはメーレン、ジャラン、ジャンギです。ペードンも出勤できます。必ず一定期間、政府に

---

<sup>14</sup> チンギスハーンの子孫。

<sup>15</sup> 軍隊の編制上の単位。中隊に相当。

なければなりません。ここの政府は常に必ず2人が当番で出勤しなければなりません。政府にいるときは、食事と乗用馬が公から提供されますよ。しかし、給料はありません。当時、旧社会、封建の清朝の制度はこのようです。

——当時、等級別の衣装、どんな衣装を着ていましたか。

衣装がどのようなだったかは関係ありません。服と帽子のジンサが違います。管旗章京と協理はサンゴのジンサ、赤いサンゴのジンサです。ノイン、ジャサグ・ノイン、協理、管旗章京は赤いサンゴのジンサです。ノイン、管旗章京、協理は同じ赤いジンサ、赤いのは全部サンゴ、つまり材料はサンゴです。サンゴのジンサです。ノインにはオトガがありませんか。ノインにオトガありません。あれ、これは記憶にありません。オトガについてはよく知りません。ジャンギにはオトガがあります。ジャンギ、カー、フンダ、ハボンには皆オトガがあります。そんな帽子でしょう。いいえ、帽子というか、テレビにも出ている赤い房のついたお鉢みたいな帽子ですよ。その上にジンサという釘みたいなものがありますよ。ジンサにはサンゴ、瑪瑙、ガラス、銅があります。材料が違います。色と材料で等級を区別します。メーレンのジンサは青い、しかも真青色でした。瑪瑙や玉みたいな宝石でしょう。真青色の瑪瑙か玉のジンサです。色でも区別します。真青か淡青色で等級を区別します。淡青色をドゥリイ・フフと言います。等級をオトガでも区別します。オトガには目があるかどうか、いくつの目があるかによって区別します。オトガとは孔雀の羽毛ですよ。帽子の後ろにある尻尾みたいなものです。ジンサはそのような丸いものです。ジンサの後ろにさしてあるのが孔雀の羽毛です。孔雀の羽毛には目があります。目があるのとないで2種類あるとわたしは聞いていたように覚えています。まずジンサについて話します。次にオトガについて話します。一つ一つ話さなければ、混乱してしまいます。

ジャランにはどんなジンサかと言うと、ジャランも青色のジンサでした。青いガラスか石か、分かりません。ガラスでも作ります。石製も青いガラス製もあります。真青色でした。ジャンギのジンサは白玉だったように覚えています。白だったので、白玉と思います。わたしの父のは白玉だったようです。真っ白でした。白いは青いのより等級が下ですよ。メーレンは青い石か青い瑪瑙でした。白いは色の関係で下の等級になります。玉は宝石ですが、色が白いです。ペードンは白いガラスのジンサでした。フンダは黄銅だったように覚えています。黄銅のジンサでした。そうです。黄色い銅、真黄色でした。鉄製です。ハボンにもジンサがあります。銅だったか、何だったかをよく覚えていません。黄銅、銅だったかどうか。ええ、ハボンになると銅でしょう。石類かガラスや銅になるはずですよ。カーにもジンサがあります。カーのジンサがどんなものだったかと言うと、白いガラスのようなものだったと覚えています。ガラスかもしれない。ガラスが一番下の等級です。そうです。ガラスと銅は下の等級です。カーも白いガラスのジンサで、オトガを持っていました。オトガには目があるかどうか、目の数によって区別します。これはジンサのことです。これからオトガについて話します。

しかし、オトガについては、わたしもよく分かりません。知っている限り話します。

タイジのオトガは目がない、ただ紫色のオトガでした。真紫でした。ノインにはオトガがあるかどうか、わたしは見たことがありません。ノインにジンサのついた帽子を見たこともありません。タイジとは協理ですよ。協理は赤く紫色のジンサ、サンゴのジンサ、1つの目もない真紫のオトガでした。目がない紫色のオトガだったように思います。カーのオトガは目が付いたものでした。3つの目か、5つか、十か、どのくらいでしたか。それは目の数で、等級を区別します。どんな色かと言うと、孔雀の羽毛には丸い花がありますよね。目とはそれを指しています。色が紫色のは孔雀の羽毛です。オトガは全部が紫色ではありません。黒色のもあります。目があるのは黒色のオトガです。紫色のオトガには目がありません。協理のオトガはただの紫色のオトガです。わたしはおそらく1945年頃に見たことがあります。1945年、わたしはまだ幼かったです。1946年、わたしはたった12歳でしたよ。わたしは1回だけ、ノインが来る時に見たことがあります。当時、ノインはオトガとジンサを付けず、軍隊服を着ていました。ダムディン・タイジはオトガとジンサを付けていました。1946年、最後に1回見ました。当時、わたしは12歳でした。それは赤いジンサ、真紫のオトガでした。ダムディン・タイジは。実名はダムディン・スルンと言います。1946年に、オトガとジンサを付けることが禁止されました。「満州や清朝のものを一切付けてはいけない」と法律で公布されました。すべての人はオトガとジンサを付けてはいけません。それは満州の清朝のもので。清朝が倒れて3、40年になっているのに、モンゴル地域でまだこれを付けているのはあり得ません。では、カーは3つの目があるオトガでしたか。カーのオトガにはいくつの目があったか分かりませんが、目があるのは確かです。しかも、目があるオトガは真黒です。これから判断すると、ダムディン・タイジのオトガは紫色の、真紫色のはずです。それはとても輝いていました。紫色がとても光っていましたよ。しかし、目の多少で等級がどのように変わるかについてはよく分かりません。オトガについてよく知りません。目があることを知っています。目を数えることも知っています。いくつの目、いくつの目と言っていました。常に目の数を数えていましたよ。それ以上はよく分かりません。協理とカーにはオトガが付いていました。ジャラン、メーレン、ジャンギ等の他の人には、オトガがあったかどうかを見たことはありません。目があるかどうか、オトガがあるかどうかを見たことがないので、勝手に言うてはいけません。

我がノインは昔モンゴル・ゲルをもって移動していました。のちに固定家屋を建てました。ノインの王府<sup>16</sup>はここにありました。この前にあるのを見たでしょう<sup>17</sup>。それは我がノイン、最後の王府です。今、全部保存されているのはそれだけです。我がノインは1949年に解放されるまでそこに住んでいましたよ。またモンゴル・ゲルもあります。ノインはモンゴル・ゲルにも住みます。

---

<sup>16</sup> 王府は旗の役所と住まいの機能を兼ね備えていた。

<sup>17</sup> エジネー旗の王府は現在人民政府所在地の南側にある。

——ここには花嫁を迎える時、姑が花嫁にミルクを少し飲ませる習慣がありますか。

あります。そうです。それは結婚式で花嫁が着いた後、必ず家に入る前に、ドアの前でミルクを少し飲ませてから、家に入らせます。花嫁が来る時は今でもそうです。それはどんな意味かと言うと、祝福の意味です。口をミルクで祝福しています。花嫁が来て、入ってきて座った後、姑は花嫁の裾に、揚げ菓子などをおいて、犬を連れて来て食べさせます。トルゴード人たちもそうでしたよ。花嫁が入って来て、犬にご馳走させます。わたしは結婚式に参加したことはありません。通学の途中、参加したことがあります。わたしが 11 歳のある冬、太陽が沈む直前に 1 回寄りました。わたしたちの何人かの子どもを学校に送ろうと、ソミヤーと言うおじいさんがわたしたちを連れて、黄色い頭のアラブジルの父であるツェリンダライの結婚式に参加しました。わたしたち何人かの子どもをツェリンダライの結婚式に参加させて、1, 2 時間いて、そのおじいさんは少しお酒を飲んで、外が暗くなったので、わたしたちを連れて出て行きました。このように通学中に、結婚式に少し参加したことがあります。ツェリンダライとはユマ老人の夫です。その時、花嫁をみかけませんでした。人びとが集まって、馬もたくさんつながれていました。花嫁がすでに来ていたのか。まだ来ていなかったのか。夕方になっていたのです、来ていたと思います。それで、わたしたちをいらせ、

「ボーズ<sup>18</sup>を食べて」

と言いました。いや、馬がつながれていたのです、結婚式はおわっていたと思います。お酒を飲んで盛り上がりません。来たばかりの人にボーズを出して食べさせていました。小規模の宴会を繰り返して、酒をだしていましたが、花嫁は見かけませんでした。このように 1 回参加したことがあります。来ていた人たちは酒盛りをしていません。人びとはばらばらに来ていて、人でいっぱいになっていませんでした。太陽が沈み、夕方になり、客たちの馬をつないでいました。おそらく食事をご馳走していたと思います。管旗章京のダムディンもいました。一番地位の高い人は彼でした。義兄です。わたしたちに

「ボーズを食べて、遠慮しないで」

と、まずボーズを出してくれました。わたしたちはボーズを食べてから外に出て、ラクダのそばに行き、ふざけあって、互いにラクダの糞をぶつけあって遊んでいました。そうしているうちに、暗くなり、「では、今行きましょう」と言うことになり、わたしたちを連れて行きました。わたしたちを送っていたおじいさんはご飯を食べ、お酒も何杯か飲んだと思います。

——回民戦争について話してくれますか。

ああ、回民戦争についてわたしも書きましたよ。以前、歌詞を書きました。それは大変な出来事で

---

<sup>18</sup> 肉まんじゅう



すよ。回民戦争は歴史上はじめて起きました。国民党の公文書では「陝西の回民反乱（蜂起）」と書いているのがあります。「陝西省の回民反乱」とも言います。反乱は1862年に陝西で起きました。金積府と言うところで起きました。そこから始まりました。当時の金積府と言うところで、馬化龍と言う人が率いて蜂起しました。馬化龍と言う強盗は、回民戦争の最初のリーダーです。蜂起した原因は回民と漢人との激しい対立によります。回民が外部から入って来て、南に移住するとき、漢人たちは水源がよいところ、よい土地、平野、水源があるところを占めて、回民たちに圧力をかけ、山岳地帯に追い払っていました。回民たちが平野に来たら、漢人たちがいろいろな方法で嫌がらせをしました。回民たちにとって豚がタブーであることを利用して、漢人たちは平野で豚と鶏をたくさん飼育し、回民の行動を制限させ、彼らを追い払いました。このように対立がどんどん激しくなって、1862年に戦争が起きました。当時は太平天国の運動も起きていました。1850年代末頃に太平天国の運動が起きていました。太平天国の運動が四川省で起き、四川省から何千人の太平天国の兵士が陝西に来ました。金積府の近くに来ました。金積府の近くの、渭河の渡し場に回民の清朝の軍隊が駐屯していました。太平天国の軍隊が四川で蜂起し、漢人を襲い、漢人の官僚たちを攻撃していた時、馬化龍は渭河を守備していた4,50人の回民の清軍をそそのかし、蜂起させ、満人と漢人に反旗を翻しました。蜂起すると、陝西にいた回民、黄河の南、陝西の南にいた回民たち全部が呼応して、銀川の臨武、銀川の周辺の回民たちまで皆呼応して蜂起しました。当時、満州の清朝軍隊は太平天国の運動を弾圧するため、回民たちのことを考える余裕がありませんでした。回民たちは馬に乗り、移動が速かったので、あっという間に土地を占領しました。1862年に蜂起してから翌年までに、陝西省の省都西安と鳳翔などの3つの都市以外のほとんどの土地を占領しました。回民たちが占領してからまもなく、黄河を渡って、塔爾寺がある青海、青海の西寧、こちらでは張掖、武威などの地域の回民たちも皆蜂起しましたよ。回民たちが皆蜂起して、1864年に4つの大軍に組織されました。黄河沿岸に2つの大軍、黄河の北側の青海の西寧に1つ、甘肅の酒泉に1つ、そして黄河の南側の金積府に1つで、4つの大軍の基地を建てました。そのうち、金積府の基地が一番力が強く、一番大きな基地です。そのように4つの基地になりました。わたしたちのところに入ってきたのは甘肅の酒泉のです。ちょっと待って、1600年、いいえ、1866年か、1864年に太平天国の運動を弾圧しましたよ。太平天国の運動を弾圧してから、満州の清朝は力を集中し、西北の回民を弾圧するようになりました。当時、陝西の反乱が拡大し、西北の反乱になりました。つまり、西北の青海、甘肅、陝西、寧夏の4つの地域にまで拡大していました。はじめ、清朝から将軍を何人も派遣しましたが、全部負けてしまいました。しかし、負けるまで戦っている間に、清朝政府はなんとか太平天国の運動を弾圧できました。つまり、漢人の反乱を弾圧できました。それで、回民の反乱を弾圧する方向に転換しました。当時の清朝政府は、南方の名将である左宗棠と言う漢人将軍を派遣して、回民の問題を解決させました。この左宗棠は戦略に優れた人です。戦争が始まると、金積府を完全に包囲し、攻撃しませんでした。4つの大軍の基地の

中で、金積府の基地は一番強く、人数も一番多い基地です。回民の失敗した原因はどこにあるかと言うと、黄河の両側に2つに分けて、2つの基地を建てたので、お互いに支援することができなくなったことです。ここを完全に包囲し、出させず、攻撃もしません。金積府を包囲して1年になると、食糧がなくなり、基地の中では飢えて耐えられない状態になりました。馬化龍は飢死にしそうと、軍隊と家族を連れて、清朝軍隊に投降しました。金積府をこのように弾圧しました。そして、黄河の反対側の、少し待って、銀川の臨武だったでしょうか、黄河のもう1つの基地をすぐに破りました。そこから北に進むと戦争になりました。はじめ、青海の方が負けて、何千人が逃げ、新疆を出て、カザフスタンとキルギスタンに逃げ込みました。酒泉を攻撃すると、こちらの回民たちも耐えられなくなり、エジネーに逃げ込み、エジネーを攻撃しました。実は、回民の反乱が始まってから、エジネーを偵察し、将来の逃走路として準備していました。酒泉を出て、エジネーを通り、ハルハまで、満州の清朝が建てた十の駅がありました。1867年、1868年の時、酒泉の回民たちはエジネーに馬を買いに来ていました。エジネーからよい馬を買っていました。しかも、1頭の馬に1斤<sup>19</sup>半の銀をくれます。エジネーのトルゴード人たちはとても喜んで、馬の値が上がったと、と回民たちにより馬を売っていました。彼らは馬を買う際、エジネーの地形を見て、道を覚え、エジネーから北のジグドツァガーンを出て、マリアーの方向に、何々オンギだったか、ハルハのオンギ、名前が出てこないね、そこまで繋がっていた駅道をハルハまで偵察し、ハルハからも馬を買っていました。そのように全部準備していましたよ。わが故郷の人びとはこれを知らず、喜んで馬を売っていました。主にエジネーから多くの馬を買いました。これは1869年以前のことですよ。このように、はじめの何年間、馬を買う際、エジネーの人、牧畜、戦力、地形を全部偵察しました。

臨夏にはドンジャン（東郷）と言う民族がいます。このドンジャンも反乱に参加しました。当時は、陝西の回民たちが蜂起しました。「回民の反乱」と言わず、ダウンガン（東甘）たちと呼んで、「ダウンガンたちの反乱」と言います。「回民の反乱」と言わなくなりました。このダウンガンと言うのは、ドンジャンのドンを取り、甘肅（漢語でガンス *gansu*）のガン（甘）を取り、ダウンガンと呼ぶようになりました。それで、「ダウンガンたちの反乱」と言うようになりました。ダウンガン人たちの反乱です。ダウンガンたちの中で、不十分なモンゴル語と不十分な漢語を話せるドンジャン族が主役になりました。エジネーに馬を買いにドンジャン人たちが来ていました。つまり、ドンジャン族です。ドンジャン人たちは半分モンゴル語、半分漢語で話します。モンゴル人たちはぼかんとしました。「おお、綺麗なモンゴル語ができますね。もしかしたら昔わたしたちは同じ祖先だと言われている、同じ民族です」としていました。1頭のよい馬には1斤半の銀をくれるし、そのうえ、モンゴル語も話せるので、我がエジネーは安心して、馬を売却し、歓迎していました。1867年や1868年にはこうでした。十の駅がありましたが、彼らは駅に手を出しません。エジネーまでの十の駅、これは甘肅と陝西

---

<sup>19</sup> 1斤は500グラムに相当。

の総督が建ててくれた駅です。エジネーは上級機関にジョマー<sup>20</sup>を送ったり、報告したりするときに、全部これらの駅を利用していた平和な時期でした。しかし、1869年の夏のことです。この年に、あの回民たちが突然襲いかかって来ました。入ってきてすぐ、川の上流の旧牧場近くに駐屯していた30人余りの兵士を殲滅しました。おそらく、兵士全員を皆殺しにして、逃がしませんでした。回民たちが襲って来た時、政府はヤーマ・ツァガーンにありました。ダシツェレン・バイレ・ノインはこの状況を知ってすぐ、政府にいた兵士を率いて戦いました。回民たちと戦いました。すぐにやられました。回民たちは酒泉から入ってきたそうです。数年にわたって、馬を買いに来ていた時に、この地形を全部偵察していました。何百人が購入した馬に乗って戻って来ました。乗って来て、政府をどうしましたか。政府には10、20室ある平屋がありました。15室の平屋、はじめ、バヤル・マンネーは15室の平屋を建てました。回民戦争の時に20室ある平屋があったのでしょうか。また、何軒かのモンゴル・ゲルがありました。3、40人のモンゴル兵士が駐屯していた平屋ですよ。それが全部やられました。政府も終わりです。政府を略奪し、兵士を殺しました。そこから南に進み、オンドル・ボーログのサイリと言うエジネーの、500人の弟子をもつダシチョイリン寺に向かいました。サイリはちょうど夏で、ヤルナムをしていたのか、ハイリンをしていたのか、法会の最中でした。法会をしている時、大門に長い刀や銃、槍をもち、馬に乗ってきた回民たちがやって来たので、最悪の事態になりました。刀や銃、槍を持った人たちが庭門で馬から降り、最悪の事態だと、5、60人の僧侶は経をおいて、徒手空拳で先頭に立って突破して出ようとしたのですが、回民たちが刀を振り回して来るので、あっという間に戦いになり、瞬く間に40余りの僧侶の頭が切り落とされました。回民たちが来た時、本堂の中に、49室ある広い本堂の中に、約500人の僧侶が法会に参加していましたよ。正門から突破しようとして失敗したので、僧侶たちは戻り、本堂にいた僧侶たちと一緒に窓から逃げ出して、本堂の裏にあった泥の壁を突き倒し、できた裂け目から逃げ出しました。40余りの僧侶が殺されて、それ以外の僧侶は逃げ出しました。500人の僧侶の中から、45、6人がそこで殺され、首を切られ、それ以外の僧侶は逃げ出しました。年を取って逃げられなかった僧侶ものにまた捕まり、隣で殺されたでしょう。逃げられなかった者は本堂から出てきたとしてもまた殺されました。若者たちのほとんどが逃げて、後ろにあった森に逃げ込み隠れたので生き残りました。500人の僧侶には家がありますよね。回民たちは僧侶たちの家、本堂にあった多くのモノと金銀を持って行き、残りを全部燃やし尽くし、跡形もなく潰してしまいました。このように、エジネーを襲ってから、北のハルハに行きました。ハルハの半分の土地で戦い回り、ウリヤスタイに来ました。ホブト・ウリヤスタイに到達しました。ダ・フレー（今のウランバートル）にはまだ入っていません。のちに勢力を伸ばして、ハルハの4つの県の西の2県のほとんどのところに到達していましたよ。酒泉とこの地域まで勢力を拡大していました。1866年から1873年までこのように続けました。1875年になり、ようやく終息しました。

---

<sup>20</sup> 毛を抜いた家畜丸一頭。祭祀や結婚式に供される。

ハルハも同じです。酒泉にいた回民たちは、のちに酒泉、甘肅、張掖などに分散しました。こうしてアラシャー、イヘ・ジョー盟、そして北のハルハなどに分散しました。エジネーは、甘肅の酒泉とハルハの西部境界を結ぶ中間地点となり、回民の重要な拠点になりました。それで、エジネー旗の人びとは離散して、シリーンゴルに行くのはシリーンゴルに行き、甘肅の境界に行くのはそこに行き、マーゾンに行くのはマーゾンに行き、ハルハの東部に行くのはそこに行きました。ツェーリンギーン・ボラグだったか、それはどこにあったか、そこに行くのはそこに行きました。アラシャーに行く人はアラシャーに行きました。このように旗の人たちは離散し、6年間、1869年から1875年まで、エジネー旗の人びとはあちこちに離散したままでした。のちに1回集まり、政府を再建しました。

当時のバイレ・ノインとは、七代目のバイレ・ノインのダシツェレンと言う40歳を過ぎた人でした。彼はまたハルハからバドマージャブと言う妻を娶っていました。ハルハのヨスト・バイレ旗か、バルダンジャサグ旗のどちらかでしょう。そう、ヨスト・バイレ旗のバドマージャブと言うハルハ人の妻がいました。このハルハ人の妻は、そのトスティーン・ノローの南麓を夏営地にして、牧畜を営んでいました。ノインの妻はそこで夏を過ごしていました。ノイン・ダシツェレン・バイレの伯父はオルトナスンバイルと言う人でした。彼は何人かの子どもと一緒に、同じくそこに家畜を連れて、夏を過ごしていました。ノイン・ダシツェレン・バイレは政府に何人かの官吏と一緒にいました。妻はそこに、ノインはここ政府にいました。オルトナスン・タイジの奥さんも政府にいました。このようにしていると、回民たちにやられて、ダシツェレン・バイレも回民たちとの戦いで殺されました。ノインはこのように殺されました。オルトナスン・タイジの奥さんもここにいて、捕まって殺されました。オルトナスン・タイジのダシも捕まりました。ダシは13歳の時に捕まり、母が殺されるのを見たと話していました。ダシは、母親が腹を刀で裂かれ、切り目から腸が流れていたのを見たそうです。ダシは末子です。13歳の息子が連れていかれるとき、母親は手を伸ばしながら、

「ああ、わが子、わがよい子、わが子」

と腹を切り裂かれ息も絶え絶えで取り残されたそうです。13歳の子どもを回民たちが連れて行った時、母はそうに取り残されたと聞きました。ダシツェレン・ノインもそのように殺されました。兵士と一緒に回民たちと戦って殺されました。

この13歳のダシを回民たちが連れて行って、ハルハに入り、ハルハのどこか、1つの見張り所のたくさんのラクダを囲んでいるところに着き、ダシにラクダをつないでいる綱を外すように指示したそうです。ラクダをつないでいる綱を外しに行き、ラクダの綱を外している時、ラクダのつなぎ棒の向こう側の入口近くにたくさんのハルハの兵士が隠れていました。ラクダの綱を外すと、つながれていたラクダは飢えていたので、すぐに散らばって行きました。散って行くと、回民たちはラクダを追っていきます。ラクダを追いかけるはじめると、ハルハ兵士が銃で撃ちました。この間に、ダシ・タイジは救出されました。13歳の子どもはハルハ兵士とアラシャー兵士によって救われました。

そう、このようなことです。この回民軍を殲滅するため、騙すために、見張り所で何百頭のラクダを連れて来て、つないでおきました。日中1回だけ外に出し、少し食べさせ、再び連れて来てつなぎます。ラクダが入られて、脚がつながれている泥壁の後ろに兵士が隠れていました。これらラクダで騙し、回民たちを退治し、回民たちを逮捕するつもりでした。回民たちを追い出せないのが、ラクダをおいていました。回民たちも兵士がいることを知っていました。100人以上の兵士はないが、2、30人の兵士はいる。わたしたちを恐れて外に出られない。わたしたちと戦えない。逃げようとしてもわたしたちを恐れて逃げられない。こんな状況だと回民たちは思っていました。お互いに偵察して、しばらくいました。7、8日たった後、最後の日の朝、そのつながれているラクダ群に近付き、子ども（13歳のダシ）に

「あなたはが行って、ラクダを外して」

と言ったそうです。ラクダには囲いがあり、一部のラクダには足かせがありました。回民たちは

「あなたが行ってラクダを外して」

と言い、子どもが行って外すと、飢えていたラクダはすぐ牧地に行くはずで、そのとき、追いかけて連れて行くつもりでした。ラクダを外す時、回民軍がラクダ群の中に入っていました。ラクダが出て行くと、回民たちは銃と刀を帯に挟み、飢えたラクダを集めようと追いかける時、ハルハ軍が撃ち始めました。当時の回民たちには刀が多く、銃は少なく、ラクダを追いかけるため、銃をしまつて、刀を帯に挟んでいました。そして、銃の音にラクダが驚き、混乱が始まりました。そうした混乱の中、13歳の子どもが救われましたよ。

この回民の戦争と言われていることは青海省の歴史にもあるはずですが、青海にもありました。西寧にもありました。モンゴルにも回民の村があります。回民の村として何人かがモンゴルのウリヤスタイの近くにいるそうです。それは多分回民の反乱を弾圧する時、逃げ出した人たちと関連があるかもしれません。時期が合えば、関連があるはずですが、これは60年代、1862年から1875年の間のことです。十何年も続きましたよ。ロシア、キリギスタンにいるダウンガンたちはそうです。回民反乱の弾圧の時に、そこに行った人たちです。その人たちは漢語を知っているそうです。たとえば、電気のスイッチを同じ漢語で「開関」と呼んでいるそうです。そう、漢語を知っているそうです。彼らはここから行った回民たちです。彼らは今でも自分たちをダウンガンとしています。ダウンガンと言って、移住先の人たちとも異なります。もっと詳しくみると、これには世界の歴史の影響があります。世界の状況と関連があります。当時、ロシアは我が国のほとんどを包囲していました。漢人たちは自分で、1840年以降、外国の侵略者たちは中国を侵略した、と言っています。1840年から中国は半封建半植民地の社会になりました。今はこう言っていますよ。当時の漢（中国）は、北は新疆から、東北の黒龍江省まで全部ロシアの包囲の中でした。そして、ロシアが中国を脅迫して、東北地域では「ネルチンスク条約」を締結し、中国のたくさんの土地を奪い取り、また北の新疆では「伊利条約」を締結し

ました。ロシアはこのように中国を包囲していました。当時、ドゥンガンたちが蜂起した背景には、ロシア人の支持があります。ロシアの領内にもたくさんの民族がいます。ギリギス、タジク、アゼルバイジャンなどイスラム教の人びとは全部ロシアに入っていました。そして、この西域といわれる、陝西から青海、甘肅の地域を回民が占領し、回民の国を作る時代になったと彼らは思っていました。彼らにとってはとてもいいチャンスでした。満州は太平天国を弾圧し、またロシアともかなり緊張した時期でした。わたしたちを弾圧すれば、ロシアがもっと攻めてきます。そしたら、ロシアをどうします。天津とアモイからイギリスが狙っています。天津とアモイはイギリスが来て占領しました。また、「天津条約」を締結しました。不平等な条約を締結し、満州の政権はすでに外国侵略者たちの包囲圏内に入っていました。こんな状況の中で、回民たち、西部の回民たちは蜂起し、何のアラブでしたか、東トルクメニスタン、ウイグル人たちが東トルクメニスタンを建てるなら、我が回民たちも東アラブを建てるつもりだったようです。中国を包囲しているロシアなど外国侵略者は、漢という大物の力を弱らせるため、辺境にいる諸民族が各自に独立することを許可して支持し、援助します。独立のために頑張っているなら、ロシアなど外国勢力は満州の味方を支持せず、反乱軍を攻撃しないという政策をとっていました。当時、ロシアから冒険、考古等の名義でたくさんのスパイが来て、ドゥンガンたちと密かに連絡を取っていました。

「あなたたち、頑張りなさい。あなたたちに対しては何もできません。満州の清朝は太平天国の運動を弾圧して、ようやく弾圧できました。今は外国がさらに包囲しています。天津とこの海から、イギリスともう1つはフランスだっけ、すでに包囲しました。北方からロシアが中国を包囲しました。しかも、ロシア人が近付けば近付くほど、少数民族や北方の民族を援助します。全部を漢から独立させます」

とロシア人がドゥンガンたちに言いました。それで、自分たちの時代が来たとドゥンガンたち考えました。それで、蜂起しました。蜂起しましたが、ただだめでした。みんなやられてしまいました。やられたら、どうするか。西寧にいたドゥンガンたちは全部で千人で、マヤホと言う、何と言うか、リーダーがいましたよ。本に書いてあります。彼がキリギスタンとカザフスタンに行った原因は、そこに行けば何もされないからです。逃げなければ、みんな殺されます。それで、1つの国の中で、1つの民族、1つの部族が政権に反対するには必ず世界的な状況、国際事情、国内の状況を正しく判断しなければなりません。盲目的に行動してはいけません。勝利を勝ち取る可能性があるかどうかを考えるべきです。相手は政権ですよ。だめになって、首を切られるとき、後悔するかどうかも問題です。ですから、あなたは百パーセントの保証はなくても、70、80パーセントの保証がある状況の下で、行動を起こします。首を切られるなら切られて、切られなければわたしの勝ちというやり方は勝つという保証がないということです。当時の清朝の状況を見て、回民たちは蜂起し、陝西回民の反乱になりました。ドゥンガンの革命家は蜂起すると、真っ先にモンゴル地域に入ってきました。しかし、モン

ゴルは彼らと合流しませんでした。そのため、モンゴル人たちを遠慮なく害しました。当時、ロシアの500人の軍隊がダ・フレーに来て駐屯していましたよ。ロシアのツァーリ皇帝の軍隊です。回民がホブト・ウリヤスタイに侵入し、ハルハの半分を侵略しているのに、ウランバートルに駐屯していた500人の軍隊は動きませんでした。これはロシア軍が回民の反乱を裏で助けていた証拠です。裏と言うのは、ウランバートルに駐屯しながら、ハルハ人の首を切っているのを見て驚きますが、手を出しません。「ああ、わたしはボグド・ジェブツンダムバを守っています。ダ・フレーを守っています。ロシアの大使館を守っている」という名目で横から見ているだけでした。「回民たちはハルハ・モンゴルの西部を好きにやれ」という姿勢で見えていました。「ジブゼンダムバーとダ・フレーはわたしたち500人の兵士のおかげで殲滅されなかった」とロシアはモンゴルの実力をよく知っていました。「モンゴル人はラマ教を信じてもう終わりだ」とロシアは知っていたので、回民たちにモンゴル人を好きに殺害させました。では、このようですよ。

2005年5月1日午前エジネー旗で聞き取りした。

聞き手：サラングゲル、アラタンツェツェグ、児玉香菜子

## 謝辞

本稿は「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷（代表・中尾正義、通称オアシスプロジェクト、2001年～2006年）」、「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究（科研費：21221011）基盤研究（S）研究代表者・嶋田義仁・名古屋大学）」と「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の歴史生態人類学的研究（科研費：26257003）基盤研究（A）研究代表者・嶋田義仁・中部大学）」の研究成果の一部である。ソルマージャブさんに心よりお礼を申し上げる。

（なむら・千葉大学文学部外国人研究者／さらんげれる・中央民族大学蒙語系／  
こだま かなこ・千葉大学文学部）

## **An oral history of Mr. Sormajav in the Ejene district, Inner Mongolia (Part 2)**

Namula, Sarengerile and KODAMA Kanako

### **Summary:**

This oral history was provided by Mr. Sormajav (1934, born in Ejene) on May 1<sup>st</sup>, 2005. Mr. Sormajav spent his "youth" as a criminal in a prison and forced labor camp for ten or more years due to the Cultural Revolution. He describes his hard experiences in vivid detail. Also, he explained about bureaucrats of Ejene in the Qing dynasty and the Muslim Rebellion in the 19th Century.